
青髪の勇者様

ナマどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青髪の勇者様

【Nコード】

N2495M

【作者名】

ナマどら

【あらすじ】

女性絶対主義の王国シェリル。

その国に動乱期に現れる王、英明王として呼び出された青年。

しかし本来とは違った形で呼び出された彼は迎えの女性騎士、神官との出会いをきっかけに動乱に足を踏み入れていく…

（10話より残虐描写あり。残虐というほどでもないのですが）

1：森の中で

1

森の中を動く影があつた。

まず先頭を鎧兜に身を包んだ騎士が騎乗したままで進み、その横には神官らしき姿があつた。

その後ろには先頭の騎士と同様の鎧に身を包んだ騎兵が20・やはり騎乗したままで進んでいる。

「神官殿。…この先に王が居られるのですか？本当に」

訝しげに先頭を進む騎士。隊長のその声音はやや男性にしては高めだった。

事実男性ではない。

隊長も、後ろに続く騎士も、神官も、誰も彼もが女性なのだ。

2

「ええ…新王を迎え入れるための召喚の儀式。

通常反応があるはずなのですが…一切の反応がない。本来ありえないのです…」

「召喚の儀式は神官家のみに許され、伝えられている秘術。

それも許されているのは今の世界のように、世が、この国が窮地に陥っているとき…ですか」

隊長娘の言葉に神官の娘は頷き深く息をこぼす。

「そう、そのはずなのに召喚は失敗。

そして情報を集めてみれば…新しい王となりうる男性はこの森の奥にあるといわれる隠れ里に。

異世界よりの人間は世界に一人のみ。それがこの世界のルールの一つです。

誰が召喚を為したかはわかりません。ですが…相当の腕利きであることだけは確かと」

今度は隊長娘が軽やかぶりを振って、ため息をはく。

「わがシェリル国は女性優位の国家です。

体面、外交上…何より血統をつなぐために必要なだけで…実質上は…」

「それゆえに。

知性と魔力、そして王にふさわしい外見と自愛に満ちた性格。

それらを持ち合わせた完全なる者のみが我が国の王となる…そうですよ？」

そう…そのはずです。少なくとも動乱期は。

彼女らが所属し、周辺一帯、およびこの森を統治するシェリル国。その国政に関してはひどいといえる特長があった。

女性絶対主義。

つまりは男性と女性。同じ力量を持つなら必ず女性を。

多少の差でも女性が選ばれる。そういった女性の優遇政策である。つまりは男性が上位階級にのぼるということはそれだけチートということになる。

そんな環境において最上位、つまり王の位に突くのは大体は女王である。それに就くのは当然王女、姫。

そしてその良人には周辺国家の有力貴族。

または自国の有能な技術者、魔術師や資産家。
そんな優秀な立場、そして才能を求められた。
特に魔法などはある程度血縁がかかわってくるので余計、とも言える。

だが、例外が存在する

100年から200年。大体三から五世代に一度。男性の王が即位する時期がある。

それは大体的場合、シェリル国にあつて国難といえる事柄が発生したときであつた。

魔族、魔王と呼べる存在の発生。

周辺国家の侵略。

男性知識階級の一斉蜂起など一大事といわれるとき
クーデター

英明たる男性王が現れてその妻たる女王と手に手を取り合い国難に対して

その秀逸なる智謀と

その果断なる軍才

そして類まれな魔術の才。

そのどれかを、もしくは複数をもつて国難を排除し平和をもたらす。

その「英明たる王」とは異世界よりの来訪者であり、
その方法は、適切な時期に神官家の娘が女神にお願いをする。そして、召喚してもらうのだ。

しかし、今回は失敗しました。

世界にもバランスがあるらしく世界に異世界人は一人。

それ以上は女神様も受け付けてはくだらない。

神官娘が隊長娘のほうに声をかける

「……………とまってください…この先、魔法がかかっています。迷わせる魔法のようです」

結界術の一種だろう。

自分たちの進行方向に術がかかっている。

いくつかのパターンに分かれるがこの場合は一定範囲内を堂々巡りさせる。そんな魔法なようだ。

他には歩いているつもりで足踏みをし続けるようになるものなどがあるが、アレは動物にはきかない。

それゆえに此方が使われているのだろう。

「では…>>解除<<」

神官娘は杖をかざして結界の範囲。その中に干渉して行く。

魔力による構築の>>解除<<文字通りの効果を持つそれが行使され、周囲に張られた結界が崩された。

そして、それと同時に。

【誰何】

実際の声とは違う、魔法>>念話<<の声を持って言葉は届けられた。

彼女達を包む、無数といえる殺気と共に。

2：警戒

2

【誰何】

その声に対して隊長娘がまず動いた。隊をとめる。

神官娘の方を見るが敵対行動をとらない。

余計に刺激するのは役目上避けるべき。そう隊長娘は思った。

自分達がこの場に居るのは王を迎えるためであって、争いに来たのではないのだから。

「我々は争いに来たものではありません。

シェリル国宮廷神官エリス＝ノーティスの名において誓約します。

我々は争うことを望みません」

6

神官娘は声を放つ。

>> 念話<<の相手は正確にどこに居るのは不明。

ただ、>> 念話<<が届く距離の中に居るのは確か、そうしかエリスは捉えられない。

そして問題は…自分達を包むこの殺気だ。

いつでも殺せる。

そう思わせるだけの濃密なものを感じさせられる。

隊長娘も神官娘に続くように名乗る。

「同じく、近衛第一部隊中隊長リーシャ＝マクノートン。

我々に貴君らに対して敵意はない。争いにこの地に来たのではな

い。

我々はこの先に役目を果たしにきたのだ！」

【ならば誘拐か。脅迫か

西の村で誘拐騒ぎがあったことを我々は知っている。

そして、ある女貴族の下に見目麗しい少年が増えたことを知っている。

誘拐された少年と女貴族の元に現れた少年の数は同数。

油断させ我らの元からも子供らを連れ去るというのか？】

なぜあの一件を知っている…

隊長娘：リーシャは内心歯噛みし、悔やむような表情を見せた。

一部の女貴族では平民、いわゆる貧困層などの少年を連れ去ることをなんとも思わない人間がいる。

それは女性絶対主義の汚点の一つであり困った点だ。

実際国家法の中で人身売買は禁止されている。

しかし「貧困からの保護」「教育」などを名目にし、ましてや貴族間で「交流」「養育費」などお名目をつけ売買が為される。

リーシャ自身よく思っていないし、おぞましいと言う行為だが存在するのだ。そのような行為が。

西の村は人口数十の小さな村。貴族が何かしてもどうと言うこともない。

何もいえず、何も出来ない。

「有り得ぬ」

自分達のふがいなさを振り払うように、リーシャは語気を強くは

なつ。

「汝らの下に異世界よりの人間が居られるはずだ。本来異世界からの来訪者は王として迎えられる。それがこの国のしきたりだ。」

我々は彼を迎えに来た。彼に対し面会を願いたい!」

リーシャの言葉にエリスは彼女の方を見る。そして一つ息を吐くがどうにかなる、と。

そう樂觀している。ごく、わずかではあるが。

【……………いいだろう。汝ら代表二名のみ前へ進め。村への道を開く。残りは許さん】

妥当…ですね。

20とはいえ敵に回る可能性のある兵力。それを自分の懐に迎え入れるわけにはいかない。

尚且つ此方は敵意がないと表明したためエリスの側も否定することとは出来ない。

否定してしまえば「拒否する理由がある」つまり、何らかの攻撃を起こすという風にも取れるからだ。

「有難うリーシャ。けど、あまり無理はしないで。引く事も重要だから」

「だが…あまり弱気でいてもしょうがないのも事実だ。そのあたりの空気を読むのは苦手だがな」

そう、リーシャはくすりと笑うと馬を進めていく。

「では：先方からの要望により我々のみで進む。

お前たちは森の入り口で野営。何か伝達事項がある場合のみここまで来るといい。

彼らが察知しておくに進めるなり、彼らなりの対応を行うだろう」

女性兵士たちはその言葉に従い大人しく引き上げていく。

彼女たちとて理解できないわけではない。

王を迎えるという栄誉ある選抜部隊に加わられただけでもある意味幸運なのだから。

彼女達が森の外へ引き上げたのを確認すると二人は奥へ歩みを進めていく…

「【ようこそ。我らの主の下へ】」

森を抜けたその先にある集落。その入り口に立った男は>>念話<<と共に己の言葉でそう告げた。

二人を迎え入れる言葉を。

3：青髪（前書き）

ようやく主人公登場ですよ？名前は出ませんが。

3：青髪

3

「【ようこそ。我らの主の下へ】」

リーシャとエリス。二人の前に立った男はそう言って、軽く手を広げる。

そして己の役目を果たしていく。

「俺は見張り兼案内役でライルという。では二人とも此方へ。下馬した上でお願いする」

「武器はよろしいのですか？」

ふう、と男は一つ息を吐いて

「使うのであればより痛い目を見てもらう。

そして、シェリルの騎士は己の言を違える者、と隣国に触れ回るだけだな。

この国の女性絶対主義に反感を持つ国は多いし……」

前を歩いているライルはそう言って言葉を濁していく。

この国のおかれた状況はひたすらに悪い。

それを支えていたのは彼女達のような女性騎士、神官。

そして……男性下士官であった。

他国との小競り合いや魔族と呼ばれる異形のものとの争い。

その中で狩りだされるのはやはり優秀と呼べる女性士官であったのだが、その部下。

一兵卒を纏め上げる下士官達はより優秀であることが求められた。

何より最精銳は王都の守備に回ることが多く、実際の出陣する部隊の中にはまれに、ではあれ従軍経験のろくにない高級であるだけの貴族も含まれる。

そんな彼女らを支えるのが下士官だった。戦域を支え、堪え、大将を生かし勝利に導く。

それらを彼らは求められ、遂行していた。

だというのに。

「現在女王陛下は女性絶対主義の名の下に下士官、そして男性官僚の排斥を行っている。

そしてこの国は壊れつつある。…このあたりの講釈は要らないな」

ライルの言葉を聴きながら、リーシャとエリスは周囲を観察している。

森のほうから続く入り口から正面の大きな家。そこは主の家であることは正しいだろう。

そこへの道筋には何人かの男が住んでいた。

しかし彼らの視線の色は同じだ。それは…警戒だ。

「我らの主は3代の英明王に仕えたとされるフォード様だ。くれぐれも失礼のないように。

例を逸することはないと思うがね。仮にも、王の使いであるならば」

「貴君こそ、王の使いに対して失礼とは思わないのか？」

リーシャの言葉に、ライルは薄く笑う。立ち止まり、そちらに顔のみを向けて。

「お前は王じゃない。お前は男じゃあない。

この国において男を蔑み、踏みにじり、人間以下のものとして扱
う上級貴族。その一味だ。

失礼といわれるのかもしれないが、俺は直すつもりはない」

射抜くような視線。それは敵意、殺意だ。

この集落に住む人間達は外見的にはあまり好まれない容貌が多い。
いや、とエリスは否定して。

これが真実なのでしょう。私たちが、貴族が、女が捻じ曲げ
てしまっているのです。

そう思い直しているところに声がかかる。

「ライル。あまり怖がらせるでない。余計なカードを見せるのは愚
者のすることじゃ」

「フォード様。

：申し訳ございません。近衛第一部隊、および神官を名乗る娘両
名をお連れいたしました」
「ん」

視線の先、大きな目の屋敷の入り口に立つのは草色のローブを着た
老エルフ。

白髪に白いひげを膝辺りまでたらした老人だ。そして。

「アレが敵かい？爺さん」

「敵対勢力代表じゃ。敵とは言い切れんな」

その隣には前開きの騎士が鎧の下に着るような衣服をまとった青
年が立っていた。

この国ではそう見ない黒髪黒目。正確には違うといえるか。

黒が強すぎて光の加減で青にすら見えようか、という青年がいた。

「では、中へ。お話を聞きましょう。」

3：青髪（後書き）

短いし小分けしてるしでいろいろダメダメですが。

10年ぶりぐらいですのでご容赦を

とりあえず主人公登場で一区切り。比較的重めではありますが

本来英明王が表れ問題の解消に動く位置。

そこに王が現れず女王や貴族たちは暴走していきます。

さらに世界解説と起こっていることを混ぜてネタに出来たらなーと。

4：対面（前書き）

主人公が話のメインに。
ヒロイン？何のことでしょう。

4：対面

4

4人が長の家にはいつていつた。

中はそう広くはない。日本人で言うならば、10畳間と8畳間で二部屋、といったところだろう。

入り口すぐそばの8畳間。其方のほうで用意されていたテーブル。其方に椅子は一つつつ。まずエリスが座り、その反対側には英明王が座った。

「改めて用件をお聞きしよう」

英明王の後ろに立ったエルフ。フォードが口を開く。

ローブと杖を揺らし何事にも対応できるように体制を整えている。

「英明王をわが王都へお迎えに。その役目を果たしにまいりました」
「…適当にそこらの男を改造すればいいんじゃないのか？ 普段はそうしてるんだらう？」

エリスたちはその言葉に沈黙してしまう。

そして、英明王は畳み掛ける

「沈黙は真実とする。本当に男に生存権はないんだな
普段なら魔力を一定以上もっている男の顔と性格をゆがめればいいい。」

そうすれば温和で才能ある美しい王様の完成だ」
「だが…それは英明王の模倣である。」

英明王がそうであつたからそれにあやかり、英明王に似た存在を

作る。

かつて一部の女性神官がそれを提案したとき、時の女王は受け入れたとき。

果たしてそれが真実なのかはわからんがな

ただ、少なくともわしが城にいたころの王はその気配がある。

印象は違うとはいえ、誰も彼も性格が同じで美形であることは確かじゃったんだから」

英明王とフォード。二人の言葉にリーシャは反応する。

「それは…本当に真実なのですか？王までもそのような扱いを…」

「この国の王は名目上のみの存在じゃな。それは理解しておるだろう？」

対外的に王と言う立場を、外交的に用意しているだけであつて、実際には女王が取つておる。

殆ど外交交渉も今では少なくなり、ハブになっておるがのお。ただいるだけでいいんじゃないから問題はない」

「…事実ですよ？リーシャ」

エリスが口を開く。それは事実なのですと。

「初代英明王が崩御された後、そこには混乱期があつたといひますそれ以前の女王制に戻るか、もしくは男性王を立てるか。そしてそれまで虐げられていた女王制には強い反対があつたといひます。男性による。」

その反対を退けるために男性王が用意されました。

女王陛下が気に入るように、好みの男性を用意して。

つまりは女性だけではなく、男女揃つた王家による統治という形にしたわけです。

そして…」

英明王は再び口を開く。

「美形で一定以上の魔力保有。それだけでだいぶ厳しいからな。見つからない、見つかったても難しい時期があったんだろう。」

ある代でどうしても見つからなかったんだろうな。そして…生贄が用意された

……替えようがない一定以上の魔力を持った男。その男の顔を魔力で変えて婿入りさせた。

女王も今では理解しているのか…純粹培養によってそういうことが想像の範囲から抜けているのかわからんが。帝王学でも学ばせてそういったことから思考をそらせれば上出来だろう。

王族は呪いでもかかっているのか女が優勢、顔つきも女側に似るらしいからな。

美形には一応なるらしいが。遺伝的に男性本来の顔が出ることはまずないらしいな。」

ライルはその話を聞いて順に自分の中でまとめようとする。

当初、英明王の崩御のあと混乱期があった。

それ以前は女王制。それ以後、女王制下で存在しただろう男性家臣の反発。男性王制にしようという一派だな。

それを抑えるために…男性王が用意された。女王の結婚相手として。

そして王家による統治という形にしたわけだ。王家の代表による女王の統治だな。

問題はその後。

代々の女王相手には優秀な男性が用意された。
女性絶対主義は他の国からの反発をかつている。それこそ昔から。
だからこそよそからの政略結婚によってというカードが使えず、
ある代でとうとう見つからなかった。

政略結婚という手は使えない。国家的にも。
婿入りさせる側に実入りがあまりにもない話だ。だからないだろう。

そこで家臣たちがとった手段が外法ともいえる方法。
魔力の強い男を一人生贄にして女王に嫁がせた。まあ王女が姫時代だろうけど。そうであってくれ。

「まあ英明王の存在が大きいいんだろうな」

家の外で盗み聞いていたライルは一つ零してしまう。

「動乱、混乱が起きれば英明王の召喚が行われる。

男性王の存在は体的なお飾りではあるけれど、英明王が現れたときに男性統治者という前例を作っておくことで抵抗をなくす意味もあるんだろうな。女王だけのところにほんと現れても。
そして英明王がいなくなった後は女王が再び誕生する。

前例があるからだ」

家の中では再びフォードが語り始める。

「初代英明王の時点で英明王のあとは女王が再び即位するという前例が出来た。

男性王もその結婚相手という形で存在している」

「じゃあ何で動乱期では英明王じゃないとダメなんだ？女王にやら

せればいいだろう?」

黙っていたエリスが英明王に対するその答えを口に出した。

「大きいのは英明王の加護ですね。

普段の男性王や女王にはない、女神様のご加護があるのです。

魔族などが惑わせる>>魅了<<や>>混乱<<なども効きませんし。

その率いる部隊も同様に魔法が聞かなくなるのです。

一度女王陛下が軍を率いて魔族と戦ったことがあります。英明王を良しとせずに」

「…その結果…」

大敗を喫した。損耗率4割精鋭とよばれる兵士たちを失った。当時のわが祖先も命を落としている」

リーシャはそう口に出していく。人間相手も同様だ。

「人間相手になるとさらに問題が。敵の男性兵を侮ったりするんですよ…」

そして実際の戦闘経験もないので机上の空論を重視したがる傾向にあります」

「ダメじゃね?それ」

「ええダメですね、ダメダメです

ダメダメです…大半の騎士は名誉階級に近いですから。

この国は平和というより、諸外国からハブになってるというほうが近いんです

戦闘経験が高いのはそれこそ山岳地域等のゴブリンの沸くようなポイントに住まうものたちか、

山賊たちの退治に回っていた警邏部隊といえます。

そのような我が国の軍を助けてくれていたのが男性下士官の方々だったのですが…」

エリスはさらに困ったような表情を見せる。そしてリーシャが後に続くように

「彼らは戦術研究にも余念がなかった。

自らの役割、民の保護に誇りを持っていたんだ。

事実大将である貴族が混乱をきたしても下士官が支え持ちこたえるという話は良くある。

しかし現在の陛下は…それを良しとしなかった。男性下士官全員を罷免した。

戦術研究、日常の訓練、それらを「謀反の用意」と…

女王陛下から見れば殺さなかっただけありがたく思ふべき、なのだそうだがな…」

「この国の兵士は訓練をしないのか？」

英明王の言葉にフォードが答える。

「むしろアレは舞といったほうが近いな。

固定の型を繰り返す。相手がいてもその動きに決まった返しがありそれを速度を持って行うのだ。

幾ら早くとも、幾ら力強くとも…適応力がまるでない。

戦っているわけではないのだからなあ…

魔術も秀でているというレベルではないしのお」

そして、英明王がそれに反応して

「その腐りきった状態を打開するために俺を迎えにきた……ってー
とか」

4：対面（後書き）

もう少し軽いパートを入れたほうがいいのかなあとか。
貴族＞＞平民 女性＞＞男性が両立している国ですな。

5：英明王リユート

5

「その腐りきつた状態を打開するために俺を迎えにきた…ってーとか」

英明王はそういい、一息つく。

少なからず彼は収穫を得ていた。一枚岩じゃあねえんだな、と。目の前の二人は少なからず現状に不満を持っている。カードは此方から切っておくべきか、と。

「お前さんたちは俺を英明王だと思っているようだが、正確には違う。」

いや、正しくもあり、違ってもあるということだけど」

彼はそついうと後ろの老人、フォードのほうを指差して

「俺を召喚したのはこの爺だ。一応今までの王様と同じように神を手を借りたようだけど…違う神様にかりたようだからな。」

ある意味別だ」

「それで…此方では召喚出来なかった、と？」

英明王は頷き、エリスに対し視線を向ける。

「だな。さっき話した以前のこともどこまで正しいかはわからない。俺が知っているのは召喚された時にもらった基礎知識レベルだ。神様のほうのな。」

ただ、お前さんたちが信仰している女神以外の神によって召喚さ

れた・それだけ認識してくれ」

「は…はあ…」

エリスとリーシャは頷き、不承不承、といった感じで頷く。
そしてその様子に英明王は笑って

「二、三日まで。準備をととのえるから。ライル！」
「うい」

戸口をいきなりがらりと空けて男は顔を出す

「適当な泊まり処用意してやれ。この村に宿なんて高尚なものはないからな」

「…ここじゃだめなんで？」

「面倒だ」

ライル本人は気がつくよしもない。

目の前の二人が青年にとつてたいそうな美少女であり、いろいろと安全策をとっているだけだと。

「ああ、適当に挨拶させておいたほうがいいかもな。

ここには女にひどい目に合わされて流れてきたものも多い。逆上されても困る」

「…仲裁役やれってことかい、リユートの大将」

「…できるだろう？デュークに協力してもらってもいい」

デュークとはこの国の元軍人。罷免された下士官の一人だ。

有能であり人望厚く、実質上部隊を一つ。大隊規模でまとめあげていた。

当然この国でそんなに有能な男性は、不興を買えば真っ先に拒絶

される。

事実デュークは真つ先に罷免された一人だ。
女貴族にも人望厚いという話ではあったが良く知らない。この国の女は目の前の二人が初めてだったからだ。

「それでは英明「リユート」…しつ…はい？」

「リユートだ。即位も何もしていないのに王と呼ぶな」

「了解いたしました」

「はい。しつれいたします」

二人の女性はその場を離れていく。そしてそれを見送ったあと英明王…リユートはフォードの方を見る。

「さて爺さん。準備を始めなければならないようだ」

その日の夜。

「つーわけで、現状報告を聞きたい。

そろそろ迎えもきてしまったことだし、動く必要があるだろう」

フォードの家。

昼間使者二人と面会したその家の中で、集落の顔ぶれが何人が集まってきた。

「まずライル」

「あの二人はとりあえずデュークのオッサンのところに引き受けてもらった。

問題はその後だな。あの二人の部下だが

2名が森の中、結界付近。

10名が命令どおり野営している。残り8名は…」

「…伝令か」

低く声を発したのは中年のオヤジといった風情。

しかしその体軀は均整が取れ、使い込まれた鉄鎧が歴戦であることを物語っている。

使者二名を引き受けたデューク本人だ。

その言葉にライルは頷く。

「おそらく。引き取りにいくだけのはずだったのに一晩たつても出てこない。

まあまだ大丈夫でしょうがね。長く続けば兵士が増える可能性もあります」

「…行動自体は正しいのお…咎められるようなことでもあるまい」

フォードがそういえば次の報告を求める

「ここより馬で二日。西の村なのだがやはり山岳域に近いだけのことはあるな。山賊と合わさって領主襲撃すら考え始めている。元々ゴブリンなどの襲撃も多い地域だし戦闘経験が自信につながっているのだろう」

デュークが今度は報告を始める。

「目的は…子供たちの奪回だろうなあ…なんとしても止める」

「訳を聞いてもいいか？リユート」

内心同情していたのだろう。デュークは彼の方を見る。しかし答えたのはフォードだ。

「現在確認されておるのは人数の一致のみじゃ。

ゆえに無理に奪還に行ったところで罪をかぶらされるのがおちじやろうなあ。

それに…外見と共に性格もゆがめられておるなら、洗脳ぐらいはされておるじやろう。

主のために、とのお…打開策がなければ難しいわ」

「此方から協力を願い出よう。爺ならどうにかできるだろう?」

爺と呼ばれた老エルフ、フォードは苦笑浮かべつつ頷いてみせる。

「まあのお…どうにかしてやるわい…此方からなのじゃが…」
「どした爺さん」

報告を聞き、しゃべっているため喉が渴いたのか水を口にして

「あの二人、おそらくお前さんへの貢物をかねておるな」

激しく吹いた。

5：英明王リユート（後書き）

主人公の名前判明。

男性側協力者

ライル・デューク・フォードでそろい。

6：地図（前書き）

地形解説パート

戦からの改題。内容との不一致につき

6：地図

6

「あの二人、おそらくお前さんへの貢物をかねておるな」

激しく吹いたリユートはゲフゲフやりながら胸をどんどん叩いている。

「まあ立場上正室にはなれんだろうが、側室、まあお手つきになればというレベルだろうのお。」

まあ見目麗しく体つきも男が好むようなかんじではあることだしそういうことを考えても？」

「考えるかエロジジイ」

「ほうそれはもったい」>>沈黙<<」

さらに突っ込もうとしたライルを魔法的に黙らせふう、とリユートは息を吐く。

どうしたもんやら。という感じに。

「じゃあデュークは明日出てくれ。西の村が暴走しないうちに。ライルは監視だ」

「応」「りょーかい」

二人が外にでていく。

今度はフォードのほうにリユートは視線を向け

「で、爺のところは？」

「ふむ。森から出たがるやつらではないが協力はするとってはき

ておるな。

エルフはやはり外見の美しいとされる者たちが多いからのお…エルフ狩りもすくなくない」

「逆上したエルフによって森に入った人間が…とかいう話もないわけじゃあないらしいしなあ…」

「まあ良かるうて。では私は先に寝るぞ」

ふう、といきをはいて先に奥に消えるフォード。
しかしリユートは寢床に向かう様子はない。

「>>灯火<<」

棚においてある近隣の地図。

それをテーブルの上に広げて考え始める。

馬で5日程度のところまで描いてあるものだが…

「このようなものまであるのですか」

「この辺の地形、地理を知っておくのは戦略的にも…って何故お前らがいる!？」

聞こえてきた問いかけにリユートは普通に返していた。

しかし、見上げたその姿に思わず突っ込んで

「英明王…いえ、リユート様でしたね。少しお話させていただきたいと」

エリスはそう言って昼間と同じように席に着く。同じようにリーシャも。

「地図…ですか」

「そ。一般人は持っていないのか？」

テーブルの上に広げる周辺地図。それを見ながらエリスは言う。
そして彼女は頷いて

「だいたいはそうですね。まあ実際地図を必要としないというのが正しいのですが。」

もちろん商人軍人は別ですけど」

「軍人でも一般兵は上官に従うことを至上とされる。
そのため地図をもって判断を必要とするのは、大小問わず、部下をまとめる立場になってからですね。」

エリスとリーシャが自分の認識を示す。

「で、なにを？」

「現状判断だ」

問いかけに答え、リユートは地図を示す。北側の森を示し

「この国の西部。他国とは国境を山で接していて周辺国家を気にする必要はない。

まずこのあたりが我々の集落だ。奥に現在協力してもらっている
エルフの集落がある。

ここよりずっと強力な結界が張られているしまあ、見つからない
な」

「ふむふむ……」

「ここより南に2日。山の近くに西の村。

小さな村はあるがこの辺りではゴブリン狩りを行って屈強な戦
士が揃っている。

そんな環境だから女性絶対主義が浸透していないな」

リユートの説明を聞きながら二人はいきを呑む。自分なりの認識を持っているようだ、と。

「西の村から東に1日。このあたりの領主だな。」

街の周囲は木製の囲い二重三重になっている砦状態。

この森が北西端。西の村のほかに小規模の村もある。

西の村に付随する山脈と森の東。王都へと向かう途中に存在する山脈。

その二つによって、陸地とはいえ半島状になっている。

このあたりの物資は一端領主の下に集められるからそこを押さえ
てしまえば……」

目の前に二人がいるのだが男の思考はだんだんと自分のものの中に没頭していく。

ふむ…と小さくうなるようになって。そしてエリスが問いかける。

「ひょっとしてリユート様。英明王として即位されるのではなくて

…」

「ああ。正直…この国を根本から作り変える」

そして一息。男は言葉を発する。

「このシェリル国には滅んでもらう」

6：地図（後書き）

異世界人のワリにばっさりいく人間になっています。
地形描写は難しいのお。

7：協力（前書き）

お気に入りに入れてくださる方が増えている…
ありがたや。ありがたや。

7：協力

7

「このシェリル国には滅んでもらう」

「ちょ、ちよつとまっつけてください!？」

リユートの言葉にエリスは声を荒げて立ち上がる。

視線は驚愕に満ちている。まるで、いや実際信じられないものを見た、というように。

「この国を滅ぼすって…本気ですか!？貴方はこの国の王様なんですよ!？」

「女神によつて召喚されていればな。俺を召喚した神は違う。召喚されたら英明王というのならそれは確かかもしれないが…別だよ。

この国のありようは間違っている。他国からはぶられ、国交さえカケラしか存在しない。商会レベルの交易すらないんじゃないのか？腐りすぎているこのシェリルっていう大樹を根底から作り直す。

有能な、国を支えていた男をほおり出す時点で間違っている気がするんだがなあ…」

リユートの言葉に、リーシャは問いかけを行う。

「貴方は何を知っているのですか？」

「なにも?…知っていたとしても、味方になるかどうか分からないやつら相手に自分の切り札といえるカードを切るとでも?」

リユートはリーシャのほうに視線を向ける。

その交差する視線はにらみ合いであり、強いものだ。

「何かを知りたければ、この国の創世神話を紐解いてみるといい。俺が一体誰に召喚されたのか。」

それがわかればおのずと答えがわかってくるさ。

俺はそいつに、今まで女神が押し付けていたものではないものを与えられたんだ」

「どういうことですか？おしつけた、とは」

リユートは腕組みして彼女の、エリスのほうを見る。

「英明王の特徴を言ってみな」

「美貌…知力、魔力、武力…優しき自愛に満ちた名君…」

「言い換えようか。」

女が好むような顔。

女の盾になるための魔力と知力…つまりは武力。これは戦士としての力だな。将帥としての能力といっても良い。

女のいうことを聞く優しい性格。つまりは自分の言うことを聞いてくれる、思い通りにしてくれる性格だな。

そういうものを押し付けられるんだ…

歴代の英明王というのも生贄だ。今までの女王の旦那といっしょで」

「むしろ何でそんなことに？」

「さあ？そんな話を向こうから聞いたただだから。まあ…初代か何代目かわからないが。」

女王がよっぽどアレだったということしか考えられないなあ…

まあ召喚された段階では二流もいいとこだったけどな。戦闘能力。おまけでつけてくれた程度じゃあどうもな」

そんな会話を二人としながら、リユートは一つ問いかける。

「で、だ。俺は君らの望みどおり王都にはいく。」

だかな？君らの望む通りにはいかない。俺は王都に攻め上がる。君らはどうする？

俺はこの国現状を変えたいと思う。君ら二人の協力は正直にいえば心強い」

「この国の近衛第一部隊。ぶつちやけ親衛隊の隊長なんですが！？」
「この国の神官家、その次期当主なんですけど！？」

「だからどおした。そんだけえらいんだったらこの国をぶつたたきなおすのに丁度いいだろうが」

二人の反論にリユートは一刀の元に断じる。

「近衛の隊長だったからどうした？神官家の次期党首だからどうした！？」

俺らがどうにかしなきゃならんのはこの国だ。どうにかするために、何とかするために。

俺は悪名を背負ってもかまわない。ただ、ここの仲間は面白やつだった、いいやつだった。

そんなやつらが虐げられてるのが気に食わない、正当な理由があればともかく、正当な理由も為しに、男だからという理由で差別を受けているのが気に食わない」

「協力してもらえないだろうか」

二人に対し、リユートはそう告げた。

語っていた最中握っていた拳は白かった。そして二人は頷きあう

「地獄を見せることになるかもしれないが…よろしく頼む」

「はい、よろしく願います。わが主」

7：協力（後書き）

二人帰順ー

ヒロインにすべきかどーしようか、

描写におかしいところはあるとは思っただけどなーと。

ヒロインを用意するつもりはあんまりないんだよなあ…

8：亜人と剣・前（前書き）

人間以外の二種族。

8：亜人と剣・前

8

協力をエリスとリーシャ。二人が申し出て受け入れられたその翌日。

二人は目を覚ますと表、集落の広場にてリユートが鍛錬をしていた。

「シッ！」

「甘いですなあ…その程度っ！」

リユートと集落の男性との手合わせ中らしい。

二人が握っているのは金属で作られた剣状の棒。金属製の木刀といったところ

リユートはまず踏み込み、上段から袈裟懸けに振り下ろす。

しかし相手には読みきられている。上段から振り下ろされる鉄に剣を合わせられ本来の軌道からそらされてしまう。

「大振りの一刀は…凌がれてしまうところなります」

男のほうはといえば受け流し、起動からそらされれば戻りに時間がかかる。

剣の軌道を変えずらいのは男も同じだが、だったら、とでもいいたげに蹴りが飛ぶ

踏み込み、足をたたんでのいわゆるヤクザキックといわれるタイプだが今度は一歩リユートが早い。

彼の攻撃が入る一拍手前、後方に飛び、蹴りの間合いから外れて

いく。

そして

「>>盾<<」

魔法によるシールド。物理的な障壁を展開する呪文でこれだけでは攻撃力を生み出さない。

「>>加速<<」

>>盾<<を展開したまま突撃。物理障壁を展開したまま男に対して突っ込んでいく。

>>加速<<により十二分に加速したその攻撃は十分な破壊力を持つ。

「>>盾<<」

男も障壁を展開する。

加速によつて突っ込んでいくリユートだが、男はその突貫を上手く受けながしている。

単調といえば単調な攻撃だ。歴戦ともいえる男に通用しないのも確か。

リユートといえば、なら「一発はつたりをかますべきか…」な
どと思う。

「>>光<<」

リユートの発光魔法。>>灯火<<よりも明るい目潰しの魔法によつて一瞬とはいえ視界をつぶす。

それを好機とみたリユートは>>盾<<を展開したまま>>加速

<<のスピードを生かして回り込む。
そして

「>>加速<<!!」

「>>爆<<」

回りこんで多重加速による突撃を試みるがカウンター。
爆発系の魔法によって吹っ飛ばされてしまう。

「ごろごろと転がっていくリュートを見ながら男は講釈を

「目潰しを行って回り込み突撃はまあいいといえいいんですがわかり安すぎますな。

単調といえば単調。相手に読まれてしまえば、相手がなれてしまえば奇襲というのはわかりやすいだけなんですよ、りょーかいですか?」

「了解だ」

爆発をくらいながらもリュートは立ち上がってきた。

一本入れるルールは相手の急所に棒の切っ先をふれさせること。
まさにそれを行うために盾を解除し、そのカウンターをもろに食らった形になる。

「まあ、多重展開も出来るようになってきてますからこのまま精進してください」

「…へえへえ…まあ単純なのですがねー」

それでも上出来ですよ、と男は笑う。フォードが苦笑しながらリュートのほうを癒しているのが起きたばかりでその訓練を見ていた二人の女性には目に付いた。

そして、先ほどまで彼と訓練していた男。その耳はとがっており、フォードと同属。つまりはエルフであることがわかる。だがその姿はどこか違和感を感じて…その違和感に対して思った結論をエリスが口にする。

「ハーフエルフ？」

「まあそうなりますねえ…」

エリスの呟きに苦笑を浮かべながら男がわらって見せて。そのまま言葉を返していく。

集落の入り口、エルフの里のほうから影が現れた。体躯は小さく寸詰まりといった感じの体つきをした男が荷車を引いてやってくる。

「小僧。注文の品だ。」

ヒゲ面のその男は荷車に乗っけてきたそれを見せる。

剣と鎧一式だ

「これはリユートには上等すぎるのでは？」

「ハッターじゃハッター。仮にも大将をやってもらうんじやからのお？」

「旗印なんだから立派なのじゃねえとなあ？」

治療が終わったフォードとエルフの男、そして荷車を引いてきたドワーフの男が笑いあっている。

そしてその横でリユートが剣を抜き…その刃を見つめていた。

9：亜人と剣・後（前書き）

そろそろ派手にイベントを一つ入れたいところ…

9：亜人と剣・後

9

「どうかしたのですか？リユート様」

大人たち三人がげらげら笑っているところに、エリスが声をかけた。

起きたばかりのその様子はどこかしゃきつとしていない様子ではあったが、どこか物憂げなリユートが気になったという様子で。その後ろに、リユートと同じような、騎士服をまとったリーシャが続く。

「いや…これを早く使いこなせるようにならないとな。そう思っただけだよ」

「そうそう早くに使いこなせるとは思わんがなあ」

そして再びドワーフのオヤジがガハハと馬鹿笑いする。

豪快。

その一言で性格が済まされそうなオヤジドワーフのほうをリユートは見つめて

「有難うございました。親方。急なお願いであつたというのに」

「いーんだよーか。お前ら人間の男やエルフはまだいいんだ。大事にされる可能性があるからな。」

俺たちドワーフはその可能性はない。自分の腕で馬車馬の如く細工物を作らされる運命にある。今のままならな。歴代の英明王が何で今のような状態を残したかしらねえ。そんな昔のことなんざおでもいい。だがな？」

にかつと親父は笑う。

「お前はどうかしようって言うんだろ？この今を。」

だったら俺たちドワーフはお前につく。お前に味方する。それらの未来をお前にかけてやるよ」

「我らエルフも同様でしてね。全体的に年は食っているのですが人生経験が少ないというか。まあ、あちらからみれば何代にもわたって楽しめるところなのでしょう。正直、知ったことじゃありませんがね。痛い目を見せてやってほしいんですが……まあ、こちらについてくれるのかもしれませんが」

「そういう面では、我らの大将はある意味希望なんだな」

エルフ男やフォードが微笑を浮かべている。その横で少々困った様子を浮かべながら。リユートはエリスたちのほうを向いて。

「まあそういうわけさ。俺はきっかけになる。俺は途中で終わってしまうかもしれない。途中で止まっちゃうかもしれない。ただ、ここをもう一回動かすためのきっかけになるさ」

そう言ってエリスたちに手を伸ばす。

「してくれるんだろう？協力」

それは儀式といえるのだろう。

昨晩の約束を知らなかった男たちの前でその約束を示す。それによつてこちら側についたことを正式にリユートの仲間に表明する。そのための儀式なのだ。

頷き、まずエリスがリユートの前に傳いて

「シェリル国宮廷神官エリス」ノ・ティス。

わが一族代々に伝わる技術、技法全てを使い、主君リユート様に忠節を誓います」

「シェリル国近衛第一部隊隊長リーシャ」マクノートン。

わが一族代々の戦術・剣術全てを用い、今この時より主君リユート様にわが剣を捧げます」

エリスに続いて、騎士服であったリーシャが傳き、忠誠を誓う。そしてそれに続くものがいた。

「年を食った老骨ではあるが…親子共々わが主君に忠節を誓おう」

フォードとハーフエルフの男が。

「わしらの技術。我らの秘術。それをもってお主らに力をかそう。お前がこの国を変えろというのなら、お前に…忠節を誓う。」

エリスは不思議に思っていた。この国では、いや、この世界では差別主義は普通のことだ。

この国のように男女、というのが珍しいだけで、貴族と平民。力あるものと無き者その差はある。

貧富の差、というのもそれに含まれるだろう。だが、目の前の彼は違うのだ。

エルフも、ハーフエルフも、人間もドワーフも。公平に見ている。

「俺は、みんなから学ぶことがたくさんある。

剣も、魔法も、戦術も、策略も、何もかもがたりない。だから教えて欲しいと思う。

ただ…あきらめはしない。こんないいやつらが虐げられているの

は間違っている。そう思う。

だから…俺はこの国で、少なからず、男女が笑って過ごせる場所を作ってみようと思う。同じ場所で、同じように。

そんな場所すらここにはないんだから」

そう言って、リユートは…少し笑う。

「少し陳腐かもしれないけど…遣り通すことを、この剣に誓おう。誰も彼もが笑えるように。ありがちかもしれないけど、替えがたいから」

そう言って笑うリユートの表情は、エリスにとって楽しそうに見えた。

その髪は森の中からのぞく太陽の光。それによって色が変わって見えた。

本当の色は紺なのだろうか。本当にそんな色なのだろうか。

エリスにとって彼の髪は、空の色のような、深い青に見えていた。

同時刻

「まっずいな…」

監視を行っていたライルはさらに兵士が減っているのが見えた。外に五人。中に二人。半数以上が散っている。

もう兵士を呼びにいったのだろうか。近くの兵士というと…そこまで考えて思い当たった。

「人攫いをやらかした領主…？」

ライルはそう思い確認する。待て待て、と。

最も近いところはそこだ。しかし数人はおそらく王都に直接か別の領主の元へ向かっているだろう。

だがしかし。あの領主の人がいなくなれば…兵士が少なくなれば、動き出す場所がある。

西の村だ。

人攫いを行われた被害者の村。兵士が少なくなったとなれば勇士を抱えるあの村だ。

さらわれた子供たちを奪い返そうとするだろう。だがゴブリンたちへの抑えも必要だ。人を残すかそれとも…少数で特攻するか…

「どっちだ、どう見る…」

リュートのほうは、自分達のほうは用意をするのに一日二日はかかる。そうなるか……

「デュークのオッサン……アンタが要だ。抑えてくれよ……」

ライルは願う。人望厚き元下士官のことを。今西の村に使者として赴いている男のことを。

9：亜人と剣・後（後書き）

前後編なことに。

最初の第一戦のプロローグみたいなことに。

10：西の村（前書き）

今回から残虐描写注意を入れます。注意というほどでもないんですが。

今回はデューク視点

10：西の村

10

「おおおっ！！！」

ライルの懸念はある意味外れている。

使いに来たデュークは断続的な襲撃に協力していたのだ。

二、三日周期での断続的なゴブリンの群れの襲撃。それが発生しているという聞き、襲ってきたゴブリン討伐に彼は参加していた。そしてそれをどこかおかしく思いながら、先陣で参加している。鎧を着込み、使い慣れた剣を振るって。

「甘いっ！」

剛剣といえる。力強い一撃は木を削った棍棒を断ち切り、そのままゴブリンの脳天を力チ割った。

生暖かい血を浴び、断末魔をあげるゴブリンを振り切り、その仲間の骸を乗り越えるようにして襲ってくるものたちを剣ではじき、タイミングをずらして向かってくるものに突き刺す。

深くは突き刺さない。引き抜くのに手間取ってはそれだけで命取りになる。

風斬り音がする。

三匹目の喉をかき切ってやり、弾いた二匹目にも引導を渡す。少しはなれたところにまだ何匹かいたのだがそこに矢が放たれた。ゴブリン一匹あたりに3から5本。頭部を中心にダメージを的確に狙える部位に当たっていく。

デュークは流石だと思う。ゴブリン相手とはいえ常に臨戦態勢をとっているような村だ。

的確といえる。デュークは今回のゴブリンの襲撃は終わったか、と引き上げにかかる。警戒は緩めない。周辺を警戒しながらも村のほうに下がっていく。終わったか、と。

村に戻って来たデュークを待っていたのは弓を抱えた女性達。そして次の警戒当番になっている男性たちだ。自分と共に戻ってきた男性たちはつかれきった様子で。とりあえず汗を流したい、とかいいながら酒場のほうに歩いていく。いっしょに歩いていこうとするデュークではあるが、呼び止められた。

「よろしいか」

「村長殿…はい」

呼び止められた彼は村長の誘導のまま、家の一つ、村長の家の中に入っていく。剣を外して傍らに置き、彼と向かい合うように座って向かい合う。そして切り出される言葉は…

「彼は…どうでしょうか」

「…彼ですか。いい男ですよ。明るく、公平だ」

彼、つまりはリユートのことだ。村長はデュークは信頼している。たがしかし、彼ほどに彼が主君と仰ぐリユートのことは信頼していない。それゆえに、彼を通して、リユートを見ようとしている。

息を村長は零す、どこか困ったように。じっと、デュークのほうを見て。

「やはりおるのですよ。領主のところへ襲撃しようと思う者が。あの屋敷に連れて行かれた、と見るのが一番自然ですからな。我らとしてはゴブリン対策として支援も受け取っております。多少の物資でありますかね。兵士は一兵たりとも。男性兵が来たのはまだ下士官殿がいたころですな。女性兵士などくるわけがない。そのため村の衆だけで堪えねばならない」

愚痴るように、村長はその言葉を続けていく、

「そのため…ですか。このような小さな村が魔物に対する要の一つになってしまっているのですよ。ここがなくなれば散らばってしまう森の中に、丘に、川に混じってしまう。それはさけるべきことです。しかし魔物に対することを怖がっている。今まで携わってきたものがやればよいではないか、と」

「理解できないものほど恐ろしいものはない。そういうわけですな」「我らとしては昔から隣にいるようなものですからな。彼らは彼らで住んでいるですよ。山越えの道などはかつてはゴブリンが使った道だとまで言われますからな…話はそれましたが、彼は信用できますか？われわれに関して…何か言っておりますか？」

村長の言葉。その問いかけに応じるようにリユートの話、そしてここに来る前に彼と、フォードから聞いた話を語っていく

「彼は西の村のみでの行動に懸念を抱いています。おそらく、この村のみでの対処は難しいだろうと。理由はいくつか有りますが大きいのは子供たちの確保です。洗脳までされているだろうというのがフォード老の意見です。」

しかし此方が協力する形であれば、子供たちにかかれた術を解けるかもしれないというものと、せめて洗脳は解ける。顔は変えられてしまったかもしれないが、親の顔はわかるように、自分が誰だ

ったのかはわかるようにできるそうです」

「そこまで変えられている可能性…ですか」

「事実、あちら好み、となりますと相応に変えられるでしょう。都合の悪い部分は、あちらから見ればいいいいのですから」

村長は、悔しそうにしわがれた拳を握る。そして、肘をたて、テーブルに肘を着いて祈るように

「お願いします。私は、もう一度孫に会いたい。どんな形でもいい。孫に会いたい。おじいちゃんと呼ばたいんですよ…私は…私は…」
「お任せあれ。村長殿…必ずや、対面させて見せましょう」

デュークは安受けあいしてしまっただけ、と軽く悔やんで見せる。だが、と頭を内心振って…彼なら引き受けたのではないか、とそう思ってしまう。自分達をいいやつだ、といい、迫害されていることに憤った彼ならば。デュークはそろそろいったん戻るべきか、と思う。そろそろ準備も整っているころだ。そう思い家の外に出る。

そこにやってきたのは同じタイミングで帰ってきた村の若者だ。どうしたのかと問いたですと…

「りよ、領主様の兵士が…あのクソ女どもの兵士が動いてる…北だ！デュークの大將！リユートのとこにやつらが向かってる！」

「おそろくは…彼女らが戻っていなかったからか…私も動く。何かあったときのために君達はここを動くな。ゴブリンの襲撃も続いている。君達が途切れたらいつせいになだれ込んでくるからな」

若者は離れ、だつたら…と包みを渡してくる。細長く棒状の包みを。

「これをもっていってくれ…上手くいけば大將の力になれる」

「わかった…助かる」

ゴ布林退治に疲れていないわけではない、だがデュークは村の厩に走り、つないであつた馬にまたがる。世話を担当していた老人に一礼し男は馬を走らせる。

「戦いだ…我々の初陣だぞ、リユート！」

10：西の村（後書き）

次回初陣ですな。

11：初陣・決断（前書き）

ヒッハーようやく第一戦ですよー

11：初陣・決断

11

「現状報告！ライル！」

「此方へ向かつてくる領主の兵士は50そこそこだ。全員騎兵。法衣を着てるのもいるから聖騎士みたいなものもいるんだろう。その後ろに150、此方は騎兵、魔道騎兵と男性兵で構成された部隊だな。此方のほうが本体だろう。聖騎士交じりは最終勧告だろうな」

ライルにより察知された領主の兵士たち。その動きを聴いたりユートはすぐにまとめ役クラスを召集した。そして現状を聞いている。

「フォード！」

「エルフの里のほうには結界の強化を行うよう通達を出したぞ。エルフの里に流れていた元男性兵士がこちらに来てくれた。総勢15ぐらいだがデューククラスの経験は持っているだろう。跡で顔を合わせる。後はハーフェルフ、そしてエルフ狩りに反感を持つエルフたちが20ほど」

「親方！」

「応、ドワーフの里から新品の剣を10振りもって来た。使いたいやつは使え。後は此方もぶん殴りてえってやつが20いる。得物ももってきてある…隠したまもな」

そして、自分達がいるフォードの家の前、ひと塊になっている女たちのほうに声をかける。

「リーシャ。部下達は使えるか」

「総勢5名。他は向こうにつきましました。申し訳ございません。しか

し、力こそ劣りますが魔道に関しては劣らないと自負はあります」

さあどうする、とリユートは思う。リーシャの部下の残りが5名、元下士官が15、エルフが20ドワーフが20。そして今ここにいる面子と集落の顔ぶれで20前後

「フォード。リーシャたちとここに残れ。十中八九やってくることを考えると双方に対処できる位置にあんたが必要だ」

「うむ。大規模にじゃな」

「ライル。森の中に侵入してくるやつがいたら魔法でぶちぬけ…たぶん俺らのうちもらしになるだろうが」

「最初は大將とぶつかるからなあ」

リユートは考える。深く、深く、意識を強く集中し、思考に没頭していく。考える、考える考える…

「親方。親方はエリスと俺と迎えに出ます。ドワーフたちと男性兵はついてきてください。エルフ衆は森の中に潜んで。戦闘が始まったら一気に撃ち始めて結構です。狙いはつける必要はありません」

「応。本当にいいのかい？そんな重要な位置」

「かまわないさ」

リユートは全員の前に出る。身につけているのはドワーフによって打ち直された騎士の鎧だ。漆黒に彩られたその鎧を着込み、声を発する。

「いいか！ここから先は俺たちは悪役となる。

やつらが俺になにを望んでいるかは知らない。

やつらが俺になにを思っているかは知りたくもない。

俺らは恨みを買おう。それまでの流れをぶち壊し、新しい流れを

作り上げよう

共に笑える世界を作ろう。共に歩める世界を作ろう。共に目指せる未来を作ろう！

それを目指すことを悪だというのなら！俺は喜んで悪になろう！総員配置につけ！簡単に死ぬなよ！」

その台詞と共にまとめ役、そしてそれに伴いそれぞれのまとめる部隊が散っていく。

森の中に消えたエルフたち。そしてライルと数名。

そして森の中を進んでいく50に満たない手勢だ。

リユートを先頭にエリス。そして親方が続き、その後方に男性兵士とドワーフたちが続く。結界のふちを抜け、森の外へ出るとそこには森を遠巻きに囲む兵士たちがいた。全て女性兵士。

そしてその中の一人、白を基調とした鎧をつけた騎兵が前にでて声を上げる。よく通る声だ。そんなことを考えつつ彼女の声を聞く。

「英明王閣下に告げる。其方に入った神官家次期当主エリス様、近衛第一部隊隊長リーシャ様の身柄をお返し願いたい。それと共に閣下を王都へお迎えするために参上した、如何か！」

「応えよう、私は汝らと共にあるわけにはいかない！

我らは男も、女も、亜人も、ともにある世界を欲する。我らは君達の女性絶対主義に反抗する！君達の求める二名も同意した！彼女らは我らと共に女王制に対して抵抗を行う。それでも俺を奪い去ろうというのなら……西の村の子供らのように！奪い去り捻じ曲げ、作り変えるといい！」

「女王陛下に反抗なされるとは本当ですか！？」

驚愕の声を持って、聖騎士はエリスに向かって声を向ける。

エリスは思う。かつてのことを。

エリスは思う。はじめて魔法を使えたときのことを。

エリスは思う。はじめて他の魔法使い達と出会ったときを。

エリスは思う。リーシャとあったときのことを。

エリスは思う……女王に始めて拝謁した時のこと。そして、そのときの喜びを。

だが…もうそれが正しいとは思えなかった。

外では血反吐を吐いている男性たちがいた。女性達は目を向けない。

外では虐げられていた男性兵士たちがいた。女性達は目をそらす。

外では虐げられていた子供たちがいた。女性達は目を向けない

外では酷使されていた亜人たちがいた。女性達は目をそらす。

そんな世界は、正しくないのだと。

「>>光矢<<」

エリスは杖を聖騎士に向け光の矢を放つ。そして、声高に聖騎士に対して宣言する。

「私の主君はこの方です！英明王リユート様ただお一人！女王陛下に対する忠誠など、私のうちにはもはや微塵もない！子供らを、亜人たちを、人を無為に迫害する陛下に対しての忠誠などもはや失せた！立ち去りなさい聖騎士！私に、私たちに文句があるのならば！弓馬をもってお受けいたします！」

「承ろつ…残念です」

そう言って聖騎士は去っていく。そして…相手の旗が動き始めた。

本体と合流はしているだろう。

向こうは総勢200近く、此方は100に満たない。ざっと倍以上の差がある。だが…何とかなると。

「
放て！！！！」

リユートは一言を発す。戦闘開始の言葉を
そしてエリスのほうを見て、いいのか、と。
それにエリスのほうも返す。いいんです。

互いの声が響き始めて戦闘が開始される。殺し合いだ。

12：初陣・戦闘（前書き）

戦闘開始。

12：初陣・戦闘

12

森の中からのエルフたちによる遠距離戦。

それがはじまってから、リユートとエリスは森の中に引く。
ドワーフたちと肩を並べ、伏兵となるのだ

「十中八九火を撃つて来ますね。騎兵中心ですから火矢はないでしょうが」

「だな。俺たちをいぶりだすつもりだろう」

親方と肩を並べ、リユートはそんな会話をしだしている。
ふむ、とリユートは思う。

このままでは不味い、と。遠距離戦の威力は向こうに一日の長がある。

それは魔法に関しては向こうに利点がある。
此方の矢のほう切れるのが早い。

「よし」

「お、おい大将!？」「リユート様!？」

リユートは立ち上がる。

矢の飛び交う中、その真っ只中に立ち上がり、敵を見る。
遠く声が聞こえる。

狙えと。殺せと。聞こえてしまう。リユートは苦笑した。
いい心がけだ、と。

「そうだな、敵は殺すべきだ。そうだな、お前はお前らは建前を一応口にした。つまりは結果生き残っていればいい。俺がしんでいたら男性兵士のせいにするか…もしくはエリスかリーシャか、どちらかに罪をかぶってもらうつもりだろう。」

…つぎけるなよ?」

リユートは前に出る。

丁度間合いに魔道騎兵が入っていたのか森の中に炎が撃たれ始める森の中。その中に炎の手が上がっていく。一つ、また一つ。

その一つ一つは大きな手となり森を焼いていく。それを、火力が広がるのを感じながら…

リユートは前進する。周囲の魔法の狙いが自分に向けられていくのがわかる。それを感じながらなおも前進する。恐れるな。そう自分に言い聞かせながら。

走り始める。

自分が前進すれば、後ろは狙われない。そう思った。親方は迷っている。前進も後退も。後一手が足りない。そう思う。周囲は火で包まれている。自分達は火に強い。だが…エルフたちは違う。

火に巻かれながらも、炎にやけどをおいながらも意地で矢を撃ち続けている。

そこに、変化があった。

集落内。

火の手をみたフォードはリーシャたちに出撃を指示した。

「一人、森の奥に馬を誘導しなさい。後は…前進するべきじゃないか？」

「…フォード様。貴方は？」

「これよりでかいのを放つ。君達は先行して合流しなさい。いいね？」

フォードはそういうと集落の中央に立つて意識を集中し始める。それを確認し、リーシャは前進。炎の中に歩みを進めていく…「武運を。」と残して。

フォードは内心ほほえましく思いながら、魔力を一点に集中し始める。

天

そこに少しずつ黒い雲が湧き出てくる。

少しずつ、少しずつ。一回り、また一回りと少しずつ大きくなっていく。

魔力よって精製された水分。そして魔道によって構築された雨雲の構成。

天候変化。

大規模な儀式魔法であり、一種の禁忌ともされる。

「…>>我らが前に恵みの雨を振らせたまえ

天よ我らの声が聞こえるのでしたら我が願い聞き届けたまえ
<<」

「>>天召降雨<<」
アクアフォール

一つ。

また一つと空からふってくるのが見える。

魔道の炎とはいえ燃え移ってしまえば、それはただの炎となる。

そのためリユートはフォードを最後方に配置した。

消火体制を整えるためだ。

兵士を取られるより、フォードの魔法で一気に消火したほうが人数は取られない。

そう考えて彼は待機させたのだ。

親方は、そしてエリスは消えていく炎を見て、指示を出した

「行くぞガキども！あの大將だけにいいところをとらせるな！」

「もう一度前へ！私たちはリユートさまを支援します！」

そこに前進してきたリーシャが合流する。

「私も続く…いくぞ」

エリスたちの脇を抜け、リーシャは前進する。

それをみて行動したのはライルだ。

「あんの馬鹿」

ライルはフォードの護衛に動き念には念を入れる。

戦場は動き始めた。そんな中、前進したリユートは…血煙の中にいた。

12：初陣・戦闘（後書き）

少し間が空きましたな。間一日ほどですが。

13：初陣・奮戦

13

「さあ…来い！」

向かってくる女性兵士。しかも騎兵の真っ只中にリユートは突っ込んでいく。

その圧迫感は流石だとリユートは思う。

だが…

「こちとら引くわけには…いかなくてなあっ！」

狙うは馬。

相手、向かってくるのは騎兵であり突撃による攻撃がその主目的だ。

ただそれは前提条件が必要になる。速さが必要であり、力が必要だということ。

高さは絶対的に相手が上回り、高所からの一撃を加えることができれば此方は早く死ぬだろう。

だが今自分は相手の懐といえる位置まで飛び込んでしまっている。そして。味方の射程距離の内側にいたのだ。

エルフたちの弓攻撃。その中にはエリスの魔法も混じっている。味方の遠隔射撃によって馬の足が止まる。それだけでいいのだ。馬に当たれば馬が止まる。転倒もする。

馬にかすれば痛みを馬が覚える。

通常の騎兵なら彼にとって問題はなかった。

馬をびびらせてしまえば…それでよいのだから。

「>>爆炎<<」

前衛に騎兵。それに魔道騎兵が混じっている。森に対しての遠隔射撃を行っていたのだろう。

此方の突撃に対して此方が少数なのを考えてか、後ろにいた騎兵達と入れ替わっていく。

自分を包囲するように騎兵が向かってくる。

その正面、自分の進行方向に対して放たれた>>爆炎<<の呪文は大音響の音と炎を撒き散らす。

馬が平静を保てないほどに。

「こ、こらおちつけっ!」「まてっ!こらあっ!」

人の中にはいつてしまえば自分の周囲のみに集中すればいい。

前方。向かってきていた騎士がどうにかバランスを立て直し、体制を整えようとしている。

恐慌状態からの建て直しであるというのに周囲の確認は行っていないのは流石だ。

だからこそ。

「死んでもらわなくちゃな」

そこまでではないかも知れないが。だが、止まって貰わなくてはならない。邪魔なのだ。

抜き身のままの剣は押さえられようとしていた馬の前足に傷をつける。

「>>加速<<」

馬がいたみに震え、蹴られる前に。それより言って早くそばを抜

ける。馬の横、そこに回って相手を見る。腕を掲げ、此方に振り下ろそうとする槍。突き入れようとするそれに対して腕を掲げる。

「>>爆砕<<」

突き下ろされる槍。それに対して弾き飛ばすように>>爆砕<<を仕掛ける。

そしてそのまま鎧の隙間を狙って剣を突き刺し、そして引き抜いた。

血が噴出し、痛みに震える馬と共に騎乗したままの騎士がびくと震えた。まだ死ぬほどではない。

だが何かショックを受けたのだろっ。痛覚と出血に。

リユートは思う。謝りたくはない。謝るわけにはいかないと。次を狙う。

向かってくる騎兵。すぐ近くにいたため加速を生かした突撃は出来ない。

だからこそ、此方は暴れることが出来る。

血が舞う。馬の脚、騎士の脚。馬の胴に出血を与えていく。

動けば動くほどに血があふれ、馬が足を止めていく。またあるものは倒れて行く。のっていたものを振り落として。ある騎士は転倒した愛馬の下敷きになって動けなくなっていた。そこに暴れていた同僚の馬によってとどめを刺された。その蹄に踏み碎かれるという形で。

ある魔道騎士は馬が暴れる中押さえ込もうとして振り落とされた。そして、打ち所が悪かったらしくそのまま目を覚まさなかった。

ある騎士は足を>>爆<<でえぐられ、出血と痛みで動揺したところ馬に誤った指示を出してしまいそこから駆け出していった。

それに近い数の兵士に囲まれながらもリユートは暴れて見せた。此方に来る前はこんなことで気はしなかった。リユートはどこかでそう思う。だが、彼は剣を古い、そして魔道を使い続けた。ここに、この世界に来る直前の会話を思い出す。

それが欲しいのですか？貴方は。

ああ。欲しい。俺が行く先がそんな世界なら…俺はそれがほしい。

必要だから。ヘタレな俺が行くんなら。

リユートは後方のほうから親方の、そしてエリスの攻撃命令を聞いた気がした。動揺しているこの状態だ。ここに打撃力が入れば大きいだろう。敵部隊を混乱させ、森のほうへの攻撃を失わせる。遠隔射撃による攻撃と自分の突撃によってそれは達成された。

そしてそれは親方達にとって、打撃を入れる十分なチャンスになる。

混乱は混乱を生み、正面、森側に対して攻撃を加えるものたちはいなくなってしまった。

馬はお互いの暴れる様子や激痛に対する悲鳴。それによって動揺してしまっている。

そこに親方たちドwarfと、下士官の部隊が到着し、リユートと共に騎兵にぶち当たっていった。

リユートは攻撃を自分と共に始めたドwarfたち、そして元下士

官達を見ながら…あのときの決断を思い返す。

力をくれ

俺に、為すべきと信じたことを後悔しないだけの…胆

13：初陣・奮戦（後書き）

主人公の異世界人勇者がもらった能力の一つ判明という回でした。
まあ根性ですが。 お決まりのイベント、要素ですけどね。

14：初陣・隠し玉（前書き）

敵パートも。

14：初陣・隠し玉

14

怯えていた。

倍以上。それだけの兵士がいたはずだ。

しかし、今目の前で起きている恐慌状態はどうか。今まで自分の積み上げてきたものが終りつつある。領主である彼女にはそう見えた。

場違いといえる物がそこにあつた。

豪華な馬車。それが一台そこに鎮座していた。

周囲には聖騎兵。この恐慌状態でも冷静に周囲に守護陣形で陣取っている。

御者は魔道師であり馬車の周囲にいつでも結界を晴れるように準備している。

元々相手の倍以上いるとはいえ、人数が多いというほどではなかった。そのため彼女がいる位置、それでも十分に恐慌状態に陥っている部隊の、馬の悲鳴が聞こえていた。

「間違っていない…間違っていない…」

馬車の中には一人の中年女性がいた。豪華な衣装に身を包み厚化粧した女だ。自分の両側に美しいといえる少年をはべらせ、その二人にすがりつくように震えていた。

彼女からしてみれば今回の出兵は無意味なもの、という認識が強かった。

それ以前に中央から派遣された神官と騎士が率いる近衛部隊、それが達成すべき任務だった。勿論協力も行う。しかし自分がこうして戦場にいる理由などないはずだった。それがどうだろうか。あれよあれよという間に、自分は危ない目にあっている。

最初は近衛部隊の兵士だった。

率いていた神官と騎士。その二人が帰ってこない。最初は誤魔化していたが日がたつてもでてこない。そういう話が出てきた。何かあったかもしれないので出兵願いたいと。

中央に対して不快感を抱かれるわけにはいかない、とほぼ全軍。そして自分自身がやってきた。

英明王を迎えればそれで終る任務なのだから、と。そうであつたはずなのに。

「おおおっ！！！！！！」

声が聞こえた。

若い男の声…敵の声だ。思ったより近く聞こえた。

自分が、この子達が危ない。そう、彼女は思った。しかし、今はまだ決断できない。

要素がたりなかった。しかし…一人の男が要素をつなげた。

デュークは回復呪文を馬につかう。そんな方法をつかつて本来二日かかるところを一日で飛ばした。

この方法自体は基本技術といつてもいい方法だ。長距離間の伝令。それを行う時は二つの方法がおもにとられている。

まず領内での場合は、リレー方式。一定区間ごとに替馬、替わりの人員を用意してリレーでつないでいく方式。だがこれは一定以上

安全が確保されている自分の味方といえる領内でのこと。

であるのなら敵地ならばどうなるか。

交替人員などあるわけもない。おもに一人で行かなければならない。そんな状況下で取られるのがこの方法だ。馬を出来るだけ長持ちさせ、その分の距離を稼ぐ。そんな方法だ。

デュークはそれを使い一気に駆けてきた。そして…追いついたのだ。

「…託された得物…この距離であれば」

それは長い筒。銃であった。

デュークは存在自体は聞いていた。

筒の中に魔力を溜め込む機構を作り、それを打ち出すことによって遠隔攻撃を可能とする。

それがドワーフ、親方達の当面の切り札なのだ。

『耐久力がある自分達が近くからでも、遠くからでも戦えるのなら、もつとあいつの力になれる。』

親方はそう言って笑っていた。デュークは自分の手に持っているものをみる。

おそらくはそのドワーフの銃。その改造型だろう。使われている魔法構造が複雑すぎる。

理解できる出来ないは別として、彼はそう断じた。自分に使えるのは基礎呪文だ。

「こっつか…？」

説明すら受けていない。だが。目の前のそれに作り出されたものにより、彼は理解した。

銃身部にひとつ。魔法陣が展開した。

銃口部にひとつ。魔法陣が展開した。

そして銃口部から少し先に、もう一つ魔法陣が展開した。

「これは…」

銃身部の魔法陣と銃口での魔法陣の色合いが違う。つまりこれは別の意味をもっていると言うことだろう。銃自体をグリップをもち、支えるようにしてもって構える。そうして実際銃を動かしてみると銃口から離れたところにある魔法陣が動いていく。

これは狙いを意味しているのか、と判断する。真実かどうかは別として。

「引き金を…引く」

そして。

展開された光景は、デュークの理解のうちから外れていた。

まず十二分に蓄積された魔力の固まりは引き金によってゴーサインを出され射出。

そして銃口部の魔法陣により、風の属性。つまり大気圧の塊と指定された弾丸は周囲に待機と共に存在する魔力を巻き込んでいく。

巨大な圧力の塊。最後の魔法陣によって方向を指定されたそれは部隊の最後方。つまりは、領主の馬車に直撃コースだった。

さすがにそうもいかない。そのまま終わりではなかった。

巨大なその接近に気がついた御者の結界によってかろうじて直撃は免れていた。

しかし。馬車を掠めていた。激しいショックが馬車を襲い、ただでさえ怯えていた領主にとどめをさすのにその一撃は十分すぎた。辛うじて馬車は動きを保ち、馬も抑えきったが、中の人はダメだったのだ。

「撤退…てつたいじゃああつ！！！！にげるのじゃああつ！！！！！！」

恥も外聞もない。

その体格から馬に乗れない彼女は大きな声で指示を出した。その声を聞くと御者が、仕方あるまいとでも言いたげに引き上げの動作をしていく。そして周囲の騎兵達も。その中で一人、別の動きがあった

20人ばかりの人の塊が動き始める中、少年が一人馬車から降り、その場に残ったのだ。

彼の主である、領主は怯えに怯え、そのことにすら気がついていない。

もう一人の少年が「ダイジョウブだよ…」と抱き返すその姿にすがりつくだけだ。

そしてそれを少しだけ見た少年は馬車から降り駆け出した。

「ママ…ママ…ママ…マモルヨ…ボクガ…ワルイヒトカラ…」

15：初陣・洗脳・終結

15

領主からの撤退命令。

それが響いた時、リユートの周囲からは人が消えていった。

騎兵中心で構成されていた敵の部隊ではあったがその半数近くが壊乱していたがその中で撤退に動いた。

騎兵が、魔道騎兵がその場から離れていく。

しかし…その中で撤退しない部隊があった。

男性兵士の部隊だ。

「ここで逃げてたまるかあっ！」

「逃げたところで場所はねえ、逃げたところで命はねえっ！」

「ならば死に花咲かすのみ、俺らの意地に付き合ってもらおうぞ英明王！」

彼らは口々に叫ぶ。

帰ったところで生きる意味はない。

帰ったところで生きる場所などありはしない。

ならば…ここで死んで、ほんの一時意地を張る。

まさに意地の結晶がそこにはあった。

「引け、ひくんだ。お前たちも！」

彼らに声かけられた。

白い鎧、聖騎士だ。男たちは笑った。目の前の相手に亜人たちを

前に彼らをひるむことはない。

ただ立ち向かう。

前にいた騎兵はいなくなった。

自分達が前衛だ。自分達が前にいる。自分達はここにいる。そう、彼らは思った。

「さあ見る世界！さあ見る女ども！ここに意地を張らせてもらおう！」

前進。

正面に突き出し男性兵士たちは奮戦する。

力ではドワーフに劣る。だが意思はより高い。

魔法ではエルフに劣る。だが戦意は上回る。

自分達は負けない。そう信じることが出来る。

「あんたが引くべきだ聖騎士の嬢ちゃん」

「いや引けないな。：君達が男としての意地を張るなら、私は聖騎士としての意地を張ろう」

「おもしれえ…」

そんな会話をし、ドワーフたちに兵士は立ち向かっていく。

ドワーフの斧に、エルフの魔法に負けずに。

その中に剣を振るう一人の男：それを兵士たちは見つけ、ターゲットとした

「あれだ：そこにいるぞ大将首、殺しても、殺されても、俺たちは記憶に残る。」

俺たちは戦場に残る、俺たちは世界に残る！」

「俺たちは世界に存在することが出来る！行くぞ王様！」

進撃する兵士たち。殺到する兵士たち…だが…そこに影が走った。

「ダメダヨ」

影が兵士たちを乗り越え、腕を振るう。

正確にはナイフを振るう。ドワーフたちに向け、そして…一番近く
にいた一人の腕が飛んだ。

鋭利にきられたその一撃は軽装とはいえ、筋肉の断面図が見える
ほど。

魔道。その言葉が浮かんだそばにいた親方はすぐに指示を出した

「やつを止めろっ！」

しかし止まらない。

腕を斬り飛ばしすぐさま別の相手に突っ込みきり飛ばす。

腕を、頬を、腹を、軽装とはいえ容赦のない連続攻撃が生まれる。

それを見て、リユート走り前に出た。

「親方！引かせろ！」

彼の声に親方はスマン、と叫び引かせようとする。

だがそれに対して影の追跡が入っていく。

「ダメダヨ？ダメダヨワルイヒト。

ニゲチャダメダヨ？オシオキダヨ？」

抑揚のない声。それを聴いたリユートは恐怖を覚えかけ、振りほどく。

だが拙い、と。そう思ってしまう。

「>>盾<<」

すばやすぎるその動き。それを少しでもとめようと障壁を張る。しかし。

「ダメダヨ？オシオキ。ママノオシオキナンド」

影がナイフをふりそのまま突っ込んでくる。

まるで障壁を切り裂いたかのような動作。リユートはそのまま後方へ飛びのきつつ剣を構え急所、喉を防御。そのまま突っ込んでくるナイフを受けていく。が。

「くっ…そっ…！！！」

とり回しが間に合わない。

受けても即座に次がくる。相手のナイフ、そのスピードに対して自分の剣のとり回しが絶対的におそい。その上。致命的といえるものがある。

剣を削ってきやがる…

相手のナイフにあわせるほど、自分の剣のほう削れ、磨り減っていく。

障壁も使えるような間合いじゃない。ギリ貧であることを感じた。

「クソっ！！>>b「ダメダヨ」

魔法。爆発を引き起こし間合いを取ろうとしても発動前に突っ込

んでくる。

早い。どうやったらこんな…とか思いはじめるが、その影に声がかかる。

「少年！お前はママのところへ行け！君が帰ってこなければ悲しむだろう！」

「カナシム？…ワカタ」

少年はその声に素直に頷き、その場から一気に駆けていく。

草原の先、馬車の走っていったほうへ。

少年は声の主。聖騎士のほうを見なかった。そして、それは、聖騎士達にとって幸福だった

影の味方であるはずの彼らですら、顔面を蒼白にしていたのだ。彼に見られていたなら、と思うと聖騎士はぞつとした。

「英明王閣下。降伏いたします」

残ったのは血とつめき声にまみれ、影に荒らしまわられた戦場の残骸だった。

そんな中、男性兵士たちを無視してリユートにかけられた聖騎士の声。

そしてそれに反論するものは相手にはいなかった。

戦闘は終了した。

しかしリユートは勝った、とは到底思えなかった…

15：初陣・洗脳・終結（後書き）

戦闘が長くなりすぎましたが強引めに終了。
次回戦後処理と追撃です。

16：追撃

16

「治療に動かせるのは何人いる」

「そう多くはない。フォードさまとエリスが中心となって指揮をしているが…」

戦場跡。

その中で敵の生き残りに治療、およびドワーフたちの治療に当たっていた。

だが状況は悪い。その以上ともいえる戦闘力の塊。それを目の当たりにしたからだ。

隠し玉も存在し、使う間もなかったドワーフの一党の戦意は揺らいでいる。

そう思われた。

「馬鹿か糞ガキ」

そんな言葉でいきなり迎えられた。

「俺たちはアレに負けた。それは事実だ。だがな？」

負けっぱなしではいられん。アレには勝つ。それは確定だし優先すべきことだ」

そう言つて笑い、腕をつないでいる仲間の元に歩いていく。

そんな状況を各種確認していたのだが。リユートにはある懸念が一つあった。

勝てるのだろうか。アレに。

南に存在する領主の館。

そこに攻め入るには少なからずあれともう一度やりあわなくちゃならない。

それを考えていた。打開策。封じる策。

少なくとも、足止めを行う策。それを行わなくてはならない。しかも。

十中八九改造されたただの子供だ。

彼らの元を考えたら彼らを殺してしまうのはいただけない。

殺さず、しかし沈黙させなければならぬのだ。…あの戦闘力を相手に。

歩きながら悩んでいる。

そのリユートの姿を見かけ声をかけた姿があった。

「英明王閣下」

「アンタか。それは止めてくれ。それは英明王として即位するつもりはない

だからそう呼ぶな」

お定まりの台詞。

そんなことを話しながら、白い鎧に身を包んだ彼女がとりに来た。

その背後に、彼女に率いられて最後まで残っていた男性兵士達だ。聖騎士たちは一般的には白の武装。

鎧や法衣等の差はあれど白の武装で固めているのが圧倒的に多い。聖騎士の仲でも前線に出て剣を得意とするものは鎧を。魔法を得意とするものは、法衣を身につけるとというのが一般的だ。

「了解いたしました。ではなんと呼びすれば」

「リユート。それでいいよ。で、なんだ？」

「彼らに関してです」

リユートは周囲に代表者を呼んだ。

治療中のフォード、エリスはともかくとして、ライル、親方、そして合流したデュークだ。

聖騎士を中心としてその前に座り込み、彼女の解説を聞く。

「彼らは作り変えられた子供たち。それは予想しておられますね？」

「ああ。どうにも無機質だし、あーいうタイプを育成するノウハウがあるとは思えない。」

だとするならばあの体格からして子供たちだと思うのが一番だろうな」

聖騎士は頷き、言葉を続ける。

「ええ。彼らは現在領主の傍にお仕えしている少年達ですね。」

彼らに戦闘能力を確実に持たせるためにそれまでの外見加工に加え、身体能力のリミッターを外したのが今の状態です。かつては薬物などもつかっていたようですが今では多くはありません」

「まあ、ないわけではないな」

薬物のほうは私が軍にいた当時何度か手合わせをしたことがある。意思捻じ曲げているうえで戦わせているからな。戦闘能力的にはひたすらに、早い。

そのうえ膂力も相応にあるからかなりてこずる」

口を挟んできたデュークの言葉にうーむとリユートは考えこんでしまう。

さらには、とデュークはさらに言葉を発す。

「薬品の場合は時間制限がある。薬品の効果が切れてしまえば……」

「ああ…」

言葉を濁すデュークに納得したリユートは軽く頷いた。
ろくなことにはならない。そしてその打開策なんだな、とリミッターの解除の理由を認識した。

自分を押さえ込むリミッター。

本来であれば安全のために押さえ込むであろうそれを外し、限界まで力を振るう。

それによって、ありえないレベルまで戦闘能力を向上させる

「そして彼らは寵愛を受けています。

治療術に関しては適切な対処をとられるでしょうから、生きてはいるでしょう。

そして意識をいじられ、彼らは領主のことを「ママ」と呼んでいます」

「ママ、か。彼らを傍に置き、見目麗しい少年をはべらせ、守らせる、か」

「貴族階級では両論ありますね。男を傍に置き守らせることに懸念を抱く家もあることはあります。

子供でも、男を使うのは男に頼らなくてはならない、家の力が低いと見られる、と」

「弱い立場にいるものをそばに置く、か。ヤダねえ」

リーシャの言葉にライルが頭を振って。よく思っていないことを示した。

「ですが特殊な能力、というのは持っていません。子供は子供なんです。つまり…」

「魔法を切ってるのはあのナイフというわけだなあ…」

聖騎士の言葉にリユートがかぶせるように言葉をつなげた。
そして聖騎士は、こっくりと頷いて見せた。

南へ。

進軍が不可能なものは集落に残留を願い、リユートたちは兵を動かした。

その間二日にはいくつかある。

デュークの持ち込んだ銃をチェックした親方はそれをセリスに渡した。

「こいつは普段から魔法を使い慣れてるやつのほうが効果がでかいだろうなあ。

調節、構築。経験が効くから使える程度のだんなよりはよほどいける」

「私としても同感だ。正直距離とって戦うよりは皆を率いて戦うほうが性に合う」

そんなことをデュークたちが口にして、それをセリスが持つことになったりした。

リーシャの持ち場からの移動、それをゆるしたフォードと軽くもめてみたり。

聖騎士の下にいた兵士たちと、元下士官達の中に見知った顔があり交友を深め合ったりしていた。

そして翌日昼には館に対するところまで来た彼らであったが、そこにもたらされた情報はある意味、彼らの予想を超えすぎていた。

「領主の町では祭りが開かれています！」

「……………はい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2495m/>

青髪の勇者様

2010年10月12日05時25分発行